

書院造り建造物中の障壁画に対する合成樹脂等による剥落どめ処置歴及び現状

著者	茂木 曙
雑誌名	保存科学
号	12
ページ	49-54
発行年	1974-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003276/



書院造り建造物中の障壁画に対する合成樹脂等による剝落どめ処置歴及び現状

茂 木 曙

1. 合成樹脂等による剝落どめ処置歴

障壁画に対する合成樹脂などによる剝落どめ処置は、かなり以前から行なわれていたが、第2次大戦終了後の混乱期に行なわれたものも多く、詳細な修理記録も殆んどなく、寺院側や、修理に関係のあった人々をたどり、その概略を知り得たものも少なくなかった。

これら障壁画のうち襖絵など紙本に描かれたものの剝落どめ処置の主要なものは次の通りである。

(剝落止実施者)

昭和18年(1943)…二条城(宮本滋基)

昭和21年(1946)…西本願寺(宇佐美松鶴堂)

昭和22年(1947)…養源院(〃)

智積院(藤岡光影堂・宮本)

円満院(宮本)

南禅寺(宮本・山川)

昭和24年(1949)…大覚寺(藤岡・宮本)

(剝落止実施者)

昭和26年(1951)…円徳院(宇佐美)

昭和27年(1952)…天球院(岡)

昭和32年(1957)…大樹寺(茂木曙)

昭和34年(1959)…三宝院(山川文吾)

昭和37年(1962)…金地院(矢口浩悦庵)

昭和41年(1966)…竜光院(宇佐美)

昭和43年(1968)…妙蓮寺(宇佐美)

これらの処置に使用された合成樹脂は、当時、東京大学助教授(現明治大学教授)、桜井高景氏の提供による溶剤タイプのアクリル樹脂と、ポリビニールアルコール(PVA)が多い。

2. 障壁画の現状

現状調査は、ごく一部の寺院に制約されたが、ここでは醍醐寺三宝院、西本願寺、大徳寺天球院についての障壁画の現状についてのべる。

醍醐寺三宝院

三宝院は障壁画に対する一連の修理が行なわれた後も、台風の被害にあったり、異状乾燥時に、襖に裂け目が生じたりして注目されたが、現状は次の通りである。

表書院柳の間で、天袋(図-1)左右の引戸の彩色の中で、葉の部分の白緑に顕著な剝離が見られ、剝落跡の下地が真新らしく、最近になって落ちたと思われる、剝離し反りかえっている彩色層のあたりは、ぬれ色が濃厚で、横から眺めると不自然な艶が認められる。この艶の原因となっている物質の層が顔料を反らせ持ち上げたと思われる(図-2)。

中段の間は遠山に杉や草花、竹と松、秋草の野などが描かれており、過去の剝落跡や補彩は

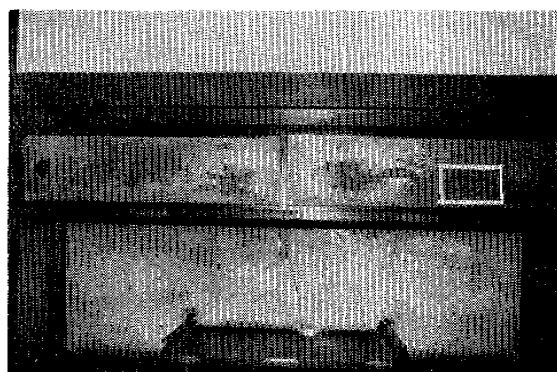
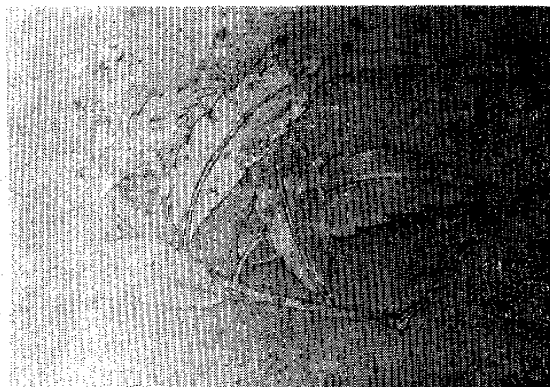
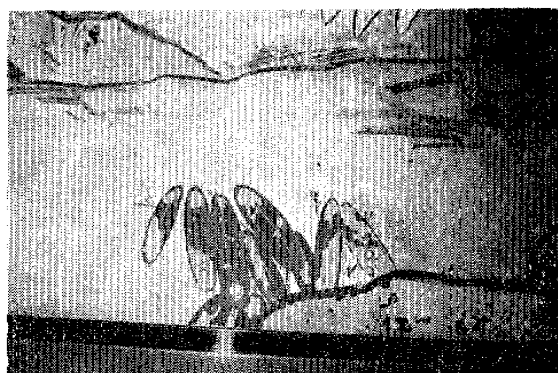


図-1 三宝院 表書院 上段の間天袋



図—2



図—3 三宝院 表書院

かなり多いが、現在進行中の剝離は見当らない。

揚舞台の間は全体に彩色が華麗で顔料層も比較的厚く、層状剝離や剝落部分が多く見られる。笹の葉部分の剝落のように輪郭を残して中央部分が剝落し、下地の紙が露出している例がある。(図—3) また図の上の方より下方部分の剝落が甚だしく、岩などの顔料がすっかり剝がれてしまった例もある(図—3, —4)。

揚舞台の間で法眼幽汀筆の銘のある衝立の彩



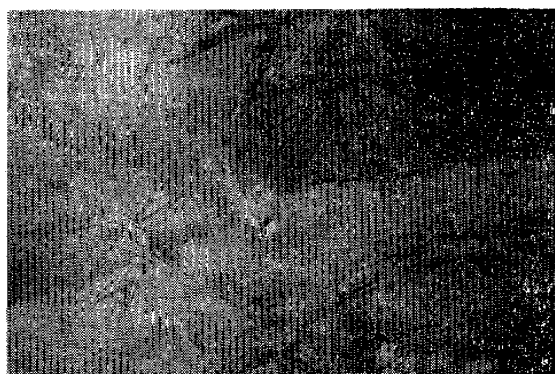
図—4



図—5 三宝院法眼筆ついたての松の幹

色は全体に損傷が甚だしいが、特に松の幹を構成する茶系の部分が後補彩色のものも含めて、剝離剝落がひどく進行中である。(図—5)。

勅使の間は多彩ではあるが、全般に顔料が薄く、過去の剝落跡はかなり目立つが現在剝離の特に顕著なものはない。小鳥の体の部分に一線を画して彩色をすき取ったような特異な剝落が認められる(図—6)。



図—6 勅使の間 小鳥部分

金箔の部分で一部に異状剝離の例がある。揚舞台の間の襖の中に現われている図。(図—7)。その部分の拡大写真を示す(図—8)(図—9)。

この少部分が特に荒れて剝離していることは不可解であるが、ここには古代色の金箔本来の渋い輝きとは別に、やや濃目のぬれ色や艶が存在していることに問題があると思う。同様な例は葵の間にも見受けられる。

秋草の間の襖も、墨と著色によって、山水および秋草の図が描かれているが、顔彩は薄手であっさりとした調子は、隣室の勅使の間の絵と相似している。一面に撒かれた金銀の切箔や砂子などが印象的であるが、やはり剝

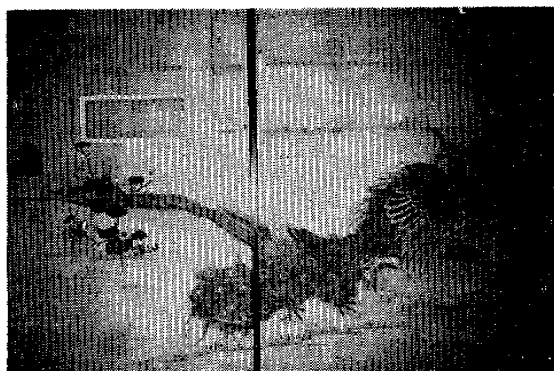


図-7 三宝院 揚舞台の間

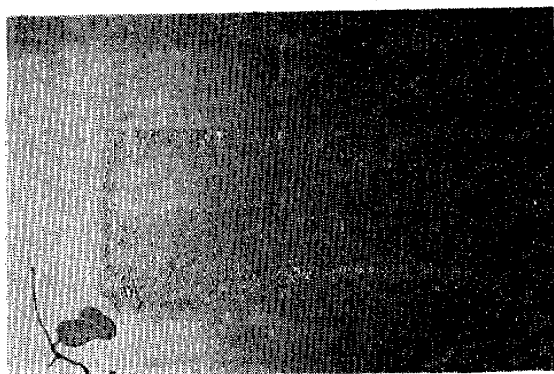


図-8 金箔の剝離

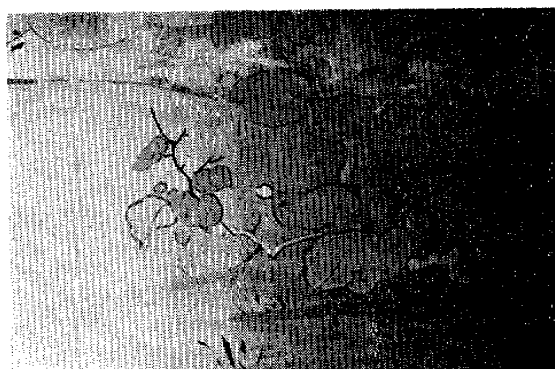


図-9 三宝院 表書院揚舞台の間

落跡とか、補彩が目につく。特に危険を感じる程の剝離は見当らない。

しかし擦過損傷の例が一ヶ所あった。襖の骨が曲がり、開けたての際に襖同志がこすれ、彩色が剝落してしまったものである(図-10)。

なお続きの奥宸殿は数年前、床の間の壁面に大きな亀裂が入り、騒がれた場所であるが、3年程前に修理が行なわれたばかりで、現在傷はない。

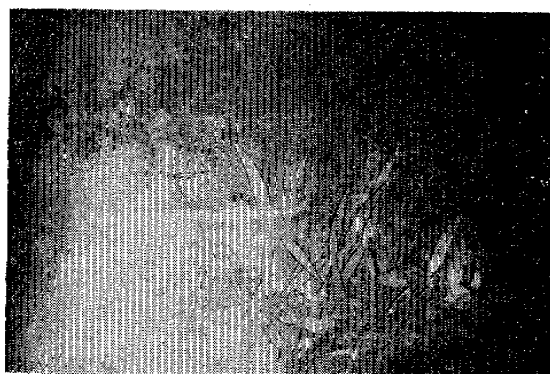


図-10 秋草のフスマのソリ返えりによる擦過

西本願寺

西本願寺には、国宝、重要文化財で障壁画を持つ建造物が非常に多い。その殆んどが江戸時代のもので、豪華なものがある。特に鴻の間とよばれる対面所は、部屋の周囲の障壁画や天井まで極彩色で埋まっている。

宏大な部屋の中で遠目に眺めた障壁画は、金碧燦然として立派ではあるが、一たび至近距離から観察すると、技法も彩色も多岐多彩な半面、損傷の種類も、亀裂、剝落、顔料や



図-11 西本願寺

け、等多くが関連し合っているのが認められる。長押上の小壁よりは下方の襖や壁面に被害が集中しているのは当然であろう。

天井絵は高過ぎて調査不可能であった。

西本願寺は、昭和 22 年 (1947) に装潢師の手によって保存処置が行なわれているが、顔料だけの剝離剝落 (図-11, 鴻の間上段),

顔料が本紙と一緒に剝落して、裏打の紙が露出した、ごく新しい剝落跡 (図-12, 鴻の間下段) 等、保存処置は急を要する状態である。鴻の間は特に人の出入りも多いようで、他室はやや良好である。一例として菊の間をあげる。天井絵のほか、障壁画は垣に菊花を主とした秋草の図が描かれているが、この芝垣や菊花弁など、ぼってりとした胡粉の置上げになっている。(図-13), (図-14) 過去に剝落した古びた痕跡は別として、新しいものは比較的少なく、また剝落注意も殆んど無い。保存処置や環境の相違であろうか。

黒書院の障壁画は、全く調子の違った枯淡な水墨画で、彩色などの剝落の心配はないが壁面に虫穴が点在し、その穴の周囲が円型に白くなる虫害がある。本紙を虫が喰い下張りが露出している (図-15)。

多いところでは、壁下地の棧に沿ってずらりと並んでいる。

妙心寺天球院

天球院の障壁画を最初に調査した折には、建造物の修理中で襖を全部とり外して、京都国立博物館収蔵庫に保管中であつた。



図-12 西本願寺 白書院鴻の間



図-13 西本願寺

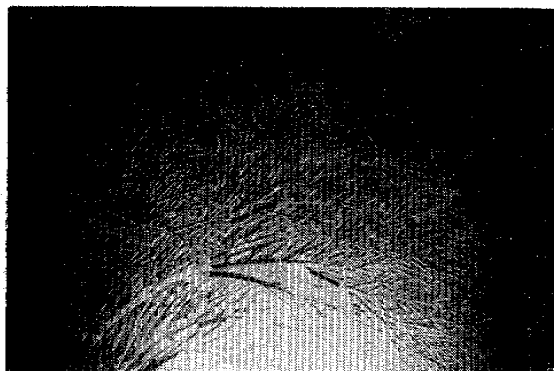


図-14 西本願寺

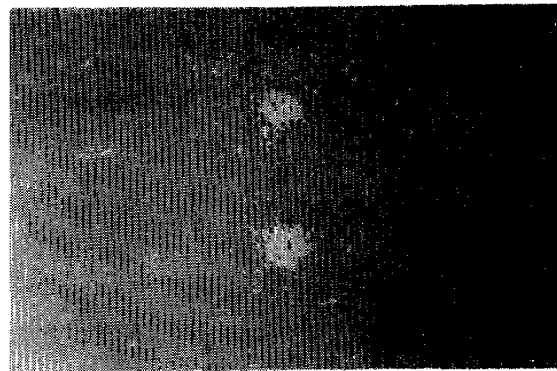


図-15 西本願寺 白書院

その中で何枚かを重点的に抜き出して拝見し、この時代の建造物と共に、使用し乍ら長年月に耐えてきた襖絵としては過去の修理のあとも少なく、且つ現在の保存状態が他に比べて良いことが注目された。これは、昭和27年に剝落どめが行なわれているが、日頃一般の拝観を謝絶し、障壁画保存について十分な配慮をされた同寺の歴代住職の努力の賜物といつて過言ではないであろう。

但し、上観の間の襖の一部に斜めに平行した裂けのあることが認められた(図-16)。この原因を明確にするためには温湿度等の気候条件、過去における装飾的修理の細部あるいは襖内部の枠組み、さらには、この襖のはまっている場所の長押など、建築構造体の歪みなどの諸要因を十分に検討する必要が認められよう。

3. あとがき

何ヶ寺かの書院造り建造物内の障壁画を見て廻り、量的にも質的にもこれだけの障壁画を、建造物と共に使用し、幾世代かに亘って、修理をくり返えし乍ら、よく残って来たものと思う。しかし、適正な保存処置が行なわれたとしても、技術者の技量や判断力、建物をとりまく環境、障壁画のある室内への人々の出入り、日射、外気の流通などの相違によって保存状態に大きな差が出来ることを、まざまざと見せつけられた。また修理を担当された方々のお話を伺い、現地を観て、また自分の経験からも、保存と活用の問題のむづかしさを痛感した。紙の上の置上げ彩色の接着、金箔のめくれの処置、絵具やけなどから始まる紙の破れ、下地材の不手際や欠損から直ちに表層の彩色にまで影響が出ることの重大さ等々、今後も更に究明しなければならぬ問題は山積している。

尚、装飾師の岡岩太郎氏、宇佐美直八氏等に御協力戴き感謝致します。



図-16 天球院 上観の間

Résumé

Akira MOGI : History and Present Results of Preventive Treatments against Exfoliation of Screen and Panel Paintings in Shoinzukuri Type Buildings

The author researched into and visited shoinzukuri type buildings containing screen and/or wall panel paintings in 13 temples and one castle. The treatment to protect those paintings was carried out in 1964 for Nijō-jō castle and Yōgen-in temple, and in 1947 for Chishaku-in, Emman-in, Nanzen-ji and Nishihongan-ji temples. As these dates happened to fall during the period of confusion immediately after the end of World War II, no detailed records of the treatment could be found.

The author visited and interviewed many people who lived in the temples and who had engaged in repairing them. Through these interviews he could confirm the time of the repairing of the following temples in addition to the above mentioned : Entoku-in temple in 1951, Daigo-ji (Sambō-in) temple in 1959, Konchi-in temple in 1962, Ryōkō-in temple in 1966 and Myōren-ji temple in 1968. The synthetic resins used in the treatment were acrylic resin dissolved in a solvent and polyvinyl alcohol dissolved in water.

The investigation carried out concerning the present conditions of the treated paintings in Daigo-ji (Sambō-in), Nishihongan-ji and Tenkyū-in temples revealed injury to paper substrates, loose adhesion and exfoliation of pigments from the substrate, turning up of gold foils, etc. Although it is difficult to say whether the treatment with synthetic resins was successful or unsuccessful because of unavailability of any detailed documents, through the author's observation some judgement can be made.

Generally speaking, paintings in rooms in which air freely entered and people frequented are more damaged. On the contrary, the wall paintings were in a very satisfactory state after repairing in those temples where the public visitors were not so full such care as sufficient shading from direct sunlight, the maintenance of an adequate temperature and proper humidity were taken.